◉ホセ・マセダ（1917〜2004）

『ゴングと竹のための音楽』

ガムランと龍笛（ピッコロ）、コントラファゴット、打楽器、合唱団のための（1997）

「もし音楽が一つの言語であり、文化や環境に結びついた統合的な歴史をもつと認められるならば、音楽には基本構造があり、その最も単純なかたちがドローンとメロディになるだろう」

（ホセ・マセダ『ドローンとメロディ』新宿書房 1989 高橋悠治編・訳）

ドローンとは短い音型の反復であり、メロディはその反復の中から浮かび上がってくる音高の列である。『ゴングと竹のための音楽』では、ガムランや竹楽器が複雑にして繊細なリズムでドローンを形成し、そこから抽出されたであろう旋律を合唱、龍笛、コントラファゴットが主に担う。

合唱のテクストとしては俳句が引用されている。

よらで過る藤沢寺のもみぢ哉　蕪村
つゝじ咲て片山里の飯白し　蕪村
看経の間を朝顔の盛り哉　許六
朝がほや人のかほにはそつがある　一茶
ひょろひょろとなほ露けしや女郎花　芭蕉

本作はかなり変則的な編成となっているが、その背景を述べておこう。1991年に千人の参加者を要する『ウドロッ・ウドロッ』を日本初演したのち、私はガムランのための新作を委嘱したのであるが、このオファーはマセダの強い拒否によって退けられた。「ガムランは王宮の、つまり権力者の音楽であり、それに携わることはできない」というのである。けんもほろろといった体である。しかしマセダだったらどんなガムラン音楽をつくるのだろうという興味は募るばかりであった。何年経っても返事は同様、困り果てた私は一計を案じた。「確かにガムランは権力に近い音楽だが、その関係を解体することは大きな意味があり、それはあなたにしかできない」と言ったのである。これにはマセダも「確かにそうだ」と言いながら「他の楽器を加えてもいいか？」と尋ねるので、「もちろん大丈夫」と答えた。そして送られてきたのが、本作の総譜であった。

では、ガムランの権力性はどのように解体されているのだろうか。私なりの見方をすれば、竹楽器ほか多くの異なった楽器を加えることによって、ガムランは中心ではなくなっている。そのガムランに目をやれば、クンダン、ルバブ、ボナンといったいわゆる花形楽器は消えている、といったように周縁化の意図は明白である。さらにガムラン音楽ではあり得ない「指揮者」が存在する。しかし、それでもなお全体として「ガムラン音楽のように」きこえるのはなぜだろう。

［中川 真］

Gender / Saron / Ketuk / Kempul / Suwukan / Ryuteki（Picc）/ C-Fg — Bamboo Instruments（Buzzer / Clapper / Scraper / 2 Sticks / 2 Tubes / Shaker / Whistle）— Chorus

初演　1997年11月8日　京都国際交流会館
ホセ・マセダ（指揮）、ダルマブダヤ＋野村 誠（ガムラン）、三宅由紀（龍笛）ほか